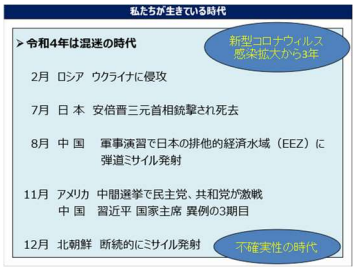
令和５年１月１０日（火）

３学期始業式　訓話

学校長　下村昌弘

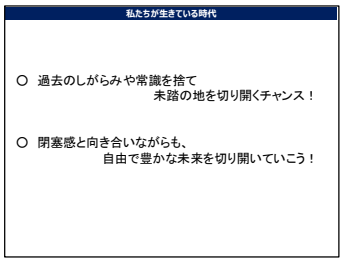
全校の皆さん、明けましておめでとうございます。新しい年が始まってすでに十日ほど経ちましたが、皆さんは年始に当たってどんな誓いを立てたでしょうか。今年こそ良い年にしたい、そんな思いで新しい年を迎えたことと思います。



昨年は、遠い将来から振り返った時、混迷の一年だったと言えるのではないかと思います。北京オリンピックの直後にロシアがウクライナに侵攻、各国がロシアに対し制裁措置を打ち出し世界の物流やお金の流れが停滞しインフレに見舞われました。

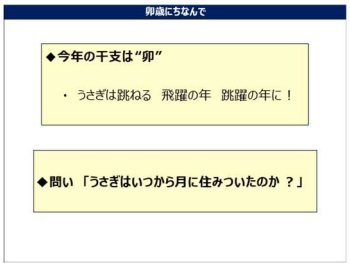
アメリカと中国の対立も深まり、中国の軍事演習で日本の排他的経済水域に弾道ミサイルが着弾し、日本でも防衛力強化の議論が高まりました。ミサイルと言えば北朝鮮は昨年一年間で１０回以上も発射しており、日本はもとより世界を震撼させています。中国では習近平国家主席が異例の３期目続投、日本では参議院選挙の遊説中に安倍晋三元首相が銃撃され死去するという悲劇が起こりました。そして新型コロナウィルスの感染拡大から３年。世界の分断はさらに深まっているように見えます。

少し大きな話をしましたが、今私たちはこうした時代を生きていて、皆さんはこれに引き続く未来を引き受けていかなければならない人たちなのです。



続く戦争、疫病とともにある暮らし、少子高齢化。世界は不確実性に覆われています。こうした、先の見えない時代だからこそ、過去のしがらみや常識を捨て未踏の地を切り開くチャンスでもあります。新しい年が幕を開けました。閉塞感と向き合いながらも、自由で豊かな未来を切り開いていきましょう。

しかし、残念ながらこうした世界の状況を直接ジブンゴトと感じることは、ほとんどできないと思います。だからといって自分とは関係のないことというのではあまりにも乱暴すぎます。世界と繋がる自分を想像してみることが、自分の考え方を幅広く柔軟なものにしてくれます。今日は想像力豊かに聞いてください。

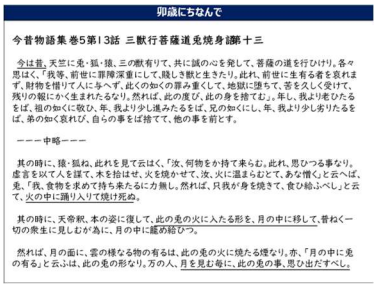


さて、令和５年、今年の干支は卯です。うさぎは跳ねる。今年は飛躍、跳躍の年としたいものです。

ところで、日本でうさぎと言えば月で餅つきをしているという姿が定番でしょうか。

そこで、今日は、「うさぎはいつから月に住み着いたのか」という話はいつごろできたかという話から説き起こしていきたいと思います。

この話は、今昔物語集にあります。今昔物語集は平安末期に作られた説話集です。帝釈天が飢えた老人に姿を変え、「食べ物がほしい」と、その時に修行をしていたうさぎ、キツネ、サルを試すのです。聞いたことがありますか？



老人に食べ物を与えるため、３匹の動物はそれぞれ探しに行きます。そして、サルは木の実を取ってきました。キツネはお墓に供えてあったものを奪ってきました。うさぎは何も見つけられなかった…。そこで兎はどうしたか。

うさぎは自ら火の中に飛び込み、我が身を老人にささげたのです。究極の慈悲、究極の利他の行いです。そこで老人は帝釈天の姿に戻り、すべての生き物にこの尊さを示すためにうさぎの姿を月に移したという話です。

ここで私が言いたいのは、仏教的な教訓ではありません。このうさぎの姿は月に移されただけで、そこで餅をついているわけではないということです。では、うさぎが月でもちをつき始めたのはいつごろからか。これを調べた人がいるのです。JAXA 宇宙科学研究所の庄司大悟さんです。

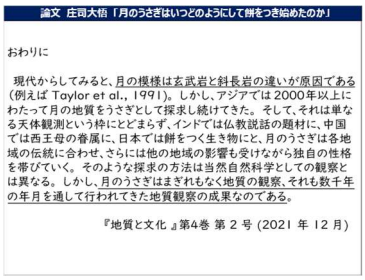
庄司さんによると、左の画のように、それまで中国では、丸い月の中に柳の木の下で杵を持つうさぎが描かれていた。中国では不老不死の仙薬を作っていたわけですが、それを江戸の市民が見て自分たちの生活に引き寄せて、うさぎがなにをしているのかを考えたのではないかと推測しています。

江戸時代は政治が安定し、経済が豊かになりはじめ、書物の流通が大幅に増え、人々の識字率が向上した時代です。いわゆる知識階級の人だけではなく、町人や農民が月のうさぎの図柄を見る機会が増えたと考えられるのです。

ところがそうした画ではうさぎが何をしているのかまでは説明されていない。そこで自分たちの生活と関連させて、うさぎが臼でついているのはきっと餅だろうと考えたのではないかというわけです。つまり、月でウサギが餅をつき始めたのは江戸時代ということになります。

私が面白いと思ったのは、この考察をした庄司さんという人が文学者や歴史学者ではなく、JAXA の研究員だということです。いわゆる科学者が古文書研究をしていることがすばらしいと感じたのです。冬休みにインターネットで調べてみたら庄司さんの論文に「木星や土星を周る氷衛星の内部構造進化と海の維持」とか「火星の地形形成」とかそういう論考に加えて確かに「月のうさぎはいつどのようにして餅を搗き始めた

のか」という論文がありました。その論文の「おわりに」にこう書いてありました。


論文 庄司大悟「月のうさぎはいつどのようにして餅をつき始めたのか」

おわりに

現代からしてみると、月の模様は玄武岩と斜長岩の違いが原因である（例えば Taylor et al., 1991）。しかし、アジアでは 2000 年以上にわたって月の地質をうさぎとして探求し続けてきた。そして、それは単なる天体観測という枠にとどまらず、インドでは仏教説話の題材に、中国では西王母の眷属に、日本では餅をつく生き物にと、月のうさぎは各地域の伝統に合わせ、さらには他の地域の影響も受けながら独自の性格を帯びていく。そのような探求の方法は当然自然科学としての観察とは異なる。しかし、月のうさぎはまぎれもなく地質の観察、それも数千年の年月を通して行われてきた地質観察の成果なのである。

『地質と文化 』第4巻 第 2 号（2021 年 12 月）

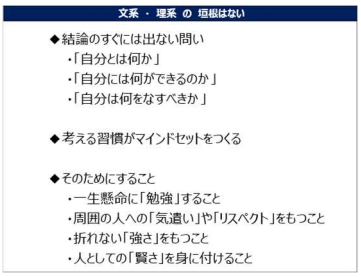
「現代からしてみると、月の模様は玄武岩と斜長岩の違いが原因である（例えば Taylor et al., 1991）。しかし、アジアでは 2000 年以上にわたって月の地質をうさぎとして探求し続けてきた。そして、それは単なる天体観測という枠にとどまらず、インドでは仏教説話の題材に、中国では西王母の眷属に、日本では餅をつく生き物にと、月のうさぎは各地域の伝統に合わせ、さらには他の地域の影響も受けながら独自の性格を帯びていく。そのような探求の方法は当然自然科学としての観察とは異なる。しかし、月のうさぎはまぎれもなく地質の観察、それも数千年の年月を通して行われてきた地質観察の成果なのである。」

『地質と文化 』第 4 巻 第 2 号（2021 年 12 月）

人類が月に到着して早くも半世紀以上が経ちました。遠くない将来、人類が月に住もうとする時に、科学の力だけでは解決できない問題がきっと出てくることでしょう。科学と文学、理系と文系、そういう別なく、どちらも大事だと、庄司さんは教えてくれています。

要は、私たちの考え方、価値観というものは、文化や歴史や伝統と深く関係しているもので、世界は多様な価値観に溢れているということです。つまり、今、皆さんはこの時代に生き、この日本で学び、多かれ少なかれ、そうした影響を受けながら、一人一人が自分の価値観を作り上げていかなければならないのです。

昨年末、ispace という日本のベンチャー企業が民間初、日本初の月面着陸に向けて探査機の打ち上げに成功しました。その計画の名前は「HAKUTO-R」だそうです。HAKUTO とは「白い兎」、「因幡の白兎」の「白兎」ですね。未来を夢見て飛び跳ねるイメージを湧かせるネーミングです。１２月に打ち上げられたこの探査機は、４月の月面着陸に向けて、画面に示してある１０のステップのうち４つまでをクリアしているそうです。このベンチャー企業は、２０４０年までに月に生活圏を作ると言っています。あと１７年後です。皆さんは３０代半ばで社会の中核で働いているときです。

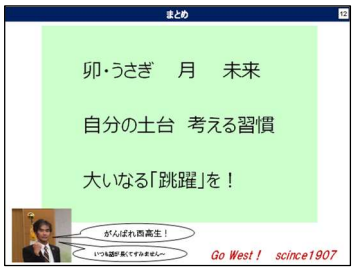


さあ、みなさん。うかうかしていられません。世の中はどんどん動いています。そんな中で学びの土台となる自分を鍛えていくために、「自分とは何か」「自分には何ができるのか」「自分は何をなすべきか」、こうした結論のすぐには出ない問いを折に触れて考え続けてください。

今、みなさんがそれぞれに取り組んでいる１つ１つのことが、直接的に、間接的に、自分の価値観や行動様式を作り出します。いわゆるマインドセットというやつです。今学んでいる具体的な知識、その知識の背後にある考え方、勉強や部活動に向かう姿勢、そういうものが蓄積され、自分という存在を創り上げていきます。だからこそ、考える習慣を捨てないことが大事なのです。

ただその前提として、肝に銘じてもらいたいことがあります。それはまず、一生懸命に「勉強」することです。狭い意味でも広い意味でも。そして周囲の人への「気遣い」や「リスペクト」をもつこと。それに少々のことには折れない「強さ」も必要です。特に、受験勉強は人をわがままにします。人は自分のうまくいかないことをすぐ他人のせいにしてしまいがちです。ささないことで人とぶつかるよりも、それを許すことのほうが人間としては立派なことです。あとは、「賢さ」を身に付けてほしいと思います。これは「勉強ができる」という意味ではない「人としての賢さ」のことです。

こうした基本的な人間性を身に付け、自分を律しながら、「自分とは何か」を考え続けてほしいと思います。



卯年のスタートです。今日はうさぎにかこつけて、月の話、未来の話、そして自分の土台を作るために考える習慣が大事だという話をしました。

唐津西高に学ぶ皆さんの大いなる「跳躍」を祈念して３学期始業式の挨拶とします。また長くなってしまいました。これで私の話を終わります。

（おわり）